

シルバニアファミリー
小動物玩具を保育の中で

いきいきとたのしく活用した実践報告

芸術教育研究所

おもちゃ研究班

鈴木みゑ子

はじめに

私達、芸術研究所おもちゃ研究班は、市販玩具の中から、本当に保育内容を盛りあげることの出来る可能性の高い、良質の玩具を選びぬぎ、年間を通して保育実践を展開している。

しかし、実践を通してみると、乳幼児教育の中では、まだまだ、子どもの必要としている保育教材・教具のより深い研究が弱いことがよく解った。特に手近にある玩具類は、“あれは保育の中の玩具とは異なる、単なる遊びを享受するための一道具である”というくらいの認識しかなく、保育内容の底の浅さを見せつけられてしまう。

このような考え方を土台として、前年のブロック玩具、プレイモビルにひきつづき、90

年度はシルバニアファミリーに取り組んだ。

東京杉並区立の保育園五園と、横浜緑区の私立幼稚園一園の協力を得て、日々の保育の中で無理なく、市販玩具の中の「小動物群——シルバニア・ファミリー」を使いこなす、

楽しい実践を展開した。この報告はその共同研究の中の一実践報告である。

実践報告——「水遊びとシルバニア」

「人形の『水遊びについて』意見を出し合い、遊びに必要な物を作成し、一緒に水遊びを楽しむ」ことをしました。

今夏は連日猛暑が続き、水不足を心配しながらも、毎日のように水遊びを楽しみました。

八月末に『シルバニア人形の水遊び』をしたいけど『どんな遊びにしたいか』来週の月曜日までに考えておくように」投げかけました。すると「やってもいいけど」と言いながら、「人形が濡れてもいいの?」「裸でやるの?」「プールで?」などと質問が飛び交い、自分の分身のように思っている人形でも、戸外へつれ出し、それも水に濡らしてもいいのだろうか、の心配がどの子に

もあつたようです。「いいよ」の一言に安心して「考えておくれ」。

話し合いの日がきました。

「どこで」水遊びをするかについては、毎日のように自分達が楽しんでいる「プールがいい」と全員の見解。『プールでは人形には大きすぎないか』と問うと、「海か湖にすればいい」という。「海がいい」「湖がいい」と意見が分かれ、しばしお互いが主張し合ってワイワイガヤガヤ。ころ合いをみて、「海と湖のちがいを尋ねてみました。「海の水は塩からく、湖は自分達の飲んでる水と同じ」で「海は波がザブンザブン大きくて、湖は静か」「魚はどっちにも住んでいる」と、よく知っています。

気持ちも落ちついたところで、「どっちにするか」自分で良いと思つた方に、人まねにならないように目をつぶって、だまって手をあげ、多い方に決めることになりました。少しの差で「湖」に決まりました。実際にある湖の名前をいくつか紹介し、「湖」がつくことを教え、「湖」に名前をつけることになりました。ゆかちゃんや花ちゃんは、夏休みするとき湖に行った話をしてくれました。

湖に名前をつけるところからは、言葉遊びがおもしろく展開しました。一番初めに花ちゃんが「カレーこ」と元気に言いました。その日の給食はカレーライスで、給食室の方からカレーの匂いが漂っていたのです。「いいこ」「わるいこ」「いたずらっこ」「いぬっこ」「こねっこ」「プールこ」「アイスこ」。果ては「きみこ」「さえこ」とお友達の名前までがとび出し、「湖」と「子」がゴチャ混ぜでしたが、子供達は、生き生きと発言して楽しんでいました。ゆうすけ君が言った「アイス湖」に、多数決で決まりました。

アイス湖でどのような遊びをしたいか、意見を出し、話し合ったところ「魚が泳いでいて、舟にのって遊ぶ」という想定。魚と舟を作るようになりました。

魚作りは、牛乳パックを開いた内側の白い所に、マジックインキで、自分の好きな大きさや形に描き、魚の形に切りました。数色のマジックインキで描いた魚は、色鮮やかな熱帯魚のようでした。大きさも様々で、一リットルパックそのままのものや、指先ほどの小さいものまであります。みきお君は、「えら」の所をくりぬくなど工夫していました。

舟は、かまぼこの板や同じくらいの大きさの木片で作ることにしました。どんな舟にしたいかイメージが湧きません。見本をみせるとみんな同じ形でへ先が三角の帆かけ舟になりました。帆は、水に濡れても丈夫な障子紙を使いました。

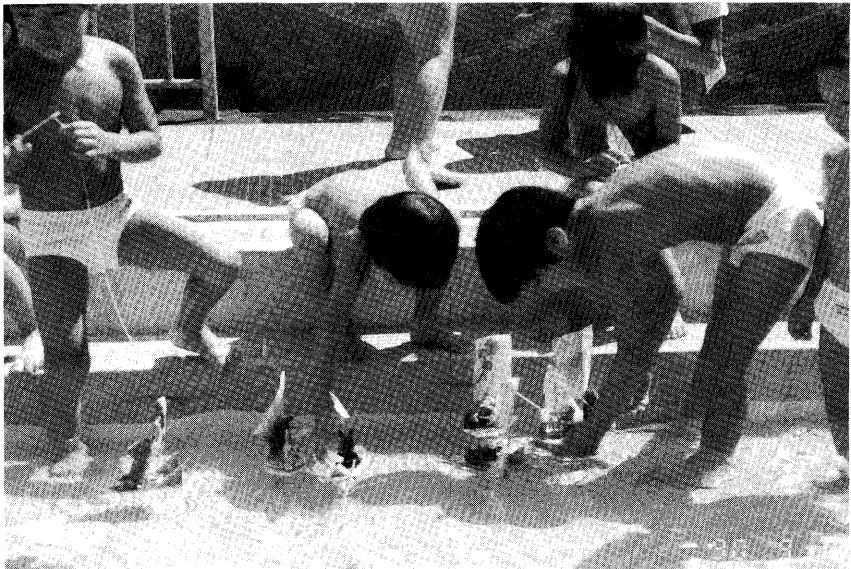
舟のへ先になる所をのこぎりで切る活動は、ある程度、保育者が切り込みを入れた所を、子供が切るようにしました。一人が板をおさえ、もう一人はのこぎりを引

くという、友達同士協力する姿がみられました。舟の本体は同じでも、舟に描いた絵や、切りおとした三角木片をつける位置、帆の形などはそれぞれの子供の発想でちがっていました。けんた君は、「魚つりもしたい」と提案し、えりちゃんと二人で「竹ぐしと凧糸」で「つりざお」作りをしました。

アイス湖で遊ぶ日がきました。真夏を思わせる残暑は絶好の水遊び日和でした。アイス湖なるプールの水は透明度一〇〇%です。太陽の明るい陽光にキラキラ輝いていました。

熱帯魚のような魚を放つと、花が咲いたみたいでとてもきれいでした。

つりざおを持った人形を舟に乗せ、少人数ずつで「そーつ」と水に浮かべました。静かな湖面を息をこらしてプールサイドから眺めました。しかしその静けさもつかの間、人形と一体感をもっている子供達は、魚をつりたいのです。誰からともなく湖に入り、自分の人形のつり糸に魚をくくりつけて、「ワァー、こんなに大きい



のがつれた！」とか「きれいな魚をつつたよー!」。もうこうなったら競い合いになり、湖面は嵐のごとし。転覆する舟や湖水に落ちてしまう人形もいます。賑やかに人形と一体となって遊び出しました。泳ぎ出す子供もいたので、人形、舟、魚はプールサイドにあげ、子供達の水遊びに移行しました。泳ぎの達者な子が多い中で、水遊びをする機会の少なかったゆうや君は、まだ泳げません。自分の人形を使って「おれ、こんな高い所からも飛び込めるよ。もぐってだって泳げるし」と言いながら、友達に自慢していました。プールから出るまで、人形を手離さないで持っていました。

今回のシルバニア人形の水遊びは、人形を媒介に一つの目的に向かって活動する中で、子供達のいろいろな姿を見ることができました。

活発に楽しんで意見を出し合い、話し合いの場では、思いがけない言葉遊びの展開。物を作る積極さと協力しあう姿、自分の願望を人形に託して遊ぶ子供。今まで人形遊びには見向きもなかった子供が、舟作りをきっか

けに参加したことなど、筋書きのないドラマが展開しました。

失敗もありました。人形と舟の大きさのバランスが悪くて、水に浮かべた途端にひっくり返ったり、木片によっては、考えられないことですが、沈むもありました。水遊びの日は、21名中16名の出席でしたので、お休みの友達を借りました。

研究発表の時、『アイス湖』に立札があったらよかった」と所長さんからアドバイス。なるほど、思いつきませんでした。

子供達がどんなことを言い出すかと冷々しながらも、私自身一緒に楽しめた活動でした。

(杉並区立永福南保育園)